

月例研究会（2019年9月26日）

『日本社会党・総評の軌跡と内実
——20人のオーラル・ヒストリー』
をめぐって

梅崎 修

本報告は、五十嵐仁・木下真志／法政大学大原社会問題研究所編『日本社会党・総評の軌跡と内実——20人のオーラル・ヒストリー』（旬報社）の研究上の価値や研究可能性を考察した書評報告である。報告内容は以下の通りであった。

本書に収められた664ページにも及ぶ20名のオーラル・ヒストリーは多くの新情報を含む歴史史料である。特に、社会党史に関する多くの語りは史料的価値が高いと言える。

インタビューはもちろんであるが、公開のための編集には編者の苦労があったと推測される。オーラル・ヒストリーが研究の共有財産になるためには、公開に向けた作業を必要とする。

大原社会問題研究所は、労働史の分野において組織的なオーラル・ヒストリーを行った先駆的な団体である。もともとは文書史料中心でオーラル・ヒストリーは、その補足という位置づけであったが、1979年発足の「産別会議研究会」から研究方法としてオーラル・ヒストリーが確立し、徐々に歴史史料として公開されるようになった。本書は、オーラル・ヒストリー・プロジェクトの伝統を引き継ぐ成果と言えよう。

本オーラル・ヒストリーの資料的価値としては、第一に有名政治家ではなく、書記を中心に語り手が選ばれており、スタッフから見た組織史が語られている点あげられる。相対的にはラインの政治家よりも「文書」を残している書記は少ないので、一つひとつの証言に希少価値

がある。また書記は、組織内決定に対して、政治家以上に正確な観察者であり、実際、本書において歴史的新事実も多い。さらに、書記自身が組織文化の体現者なので、書記の語りから社会党・総評の組織文化を把握できる。なお、本書では、社会党・総評内の派閥を踏まえて語り手が選ばれており、本書を使うと一つの出来事に対しても複数の立場から読み解くことが可能になる。

第二に、報告者が読み取った本書の魅力として、辞書的な定義を超えた「政治用語」の歴史文脈的な意味があげられる。例えば、「改良」や「社民」という言葉が避けられて、古さを感じつつ「革命論」という言葉が選ばれている。その理由については、誰が誰に対してどのよう言葉に言葉を投げかけているのかによって意味が変化することに留意しなければならない。その文脈を語りの中から読み解くことができる。

第三に、組織内の派閥については、イデオロギーや政策の対立だけでなく、世代対立を読み解くことができる。特に青年グループは急進的になり、執行部批判を行うことは多い。それゆえ、青年たちを組織内に取り込むのか、組織外に出すのかという判断があった。

最後に、政治家や組合リーダーに対する人物評が含まれることも魅力である。政治運動や労働運動において意見対立は避けられないことであるが、この意見対立が人間的な好き嫌いとは一致しないことも事実である。対立しているが、気が合う場合もあれば、その逆もある。このような人間関係を把握することが、政治や組合の歴史分析につながるのである。本書は、戦後政治史や労働史において、将来の研究への橋頭堡となりうるのである。

（うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部教授）